
テリプリ(ぶっ壊しバージョン)

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テリプリー（ぶっ壊しバージョン）

【Nコード】

N9148S

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

リープ先生の新作「テリトリリー・プリンセス」のパロディです。原作と合わせて読むと面白いと思います（一応、リープの許可は得たよ〜）

2011年5月1日、某ファミレスにて、想（詩拓）さん、リープと密会し、怪しげな文学談義に華を咲かせる。

その際、今、「小説家になろう」で話題になってる盗作問題の話になり、著作権は守らないとね、としつつ、リープは、自作をむちゃくちゃにぶっ壊したパロディも読んでみたい、と言っていた。

なるほど。そういうのはあるな。確かに、そういうのは、ある種の、怖いもの見たさというか、何というか、あるな。

てなわけで、今回、オレは、リープの新作「テリトリー・プリンス」をぶっ壊したパロディを書いてみることにする。原作と読み比べてみると面白いと思う。

プリン山高校は丘の上にあった。

だから、学生たちは大変だ。ひいひい言いながら歩いている。

その中で、一人、異様なオーラを放つ女子生徒がいた。

相川藍子。16歳。見た目は普通の高校二年生。ポニーテールで、かわいらしい顔をしてる。

しかし、彼女の周りには見えない結界が張られていた。

友達の環が、藍子に近寄ろうとすると、見えないバリアに弾き飛ばされてぶっ倒れた。

「いてててて」

環は眼鏡の位置を直して、ため息をつく。

「うっかり忘れてたよ……」

「ごめんね。たまちゃん」

実は藍子は最近、自分の周囲半径3メートル以内に誰かが入ろうとすると、見えないバリアを張りだし、はじき飛ばしてしまう……何とも厄介な体質になってしまったのだ。

同級生の秀明に告白してふられてしまったのと関係あるだろうか。わからないが、その時期からこの体質になってしまったので、どうにもそのようである。

「藍子。大変だねえ」

環が大声で言う。

「うん」

藍子が大声で答える。

学校でも、教室に入ることができなくなった。先生に事情を話すと、体質が治るまで、保健室で授業を受けなさいと言われた。教室にカメラを設置し、テレビを見ながら勉強する。まるで通信教育。家でも、家族と食事ができない。母親がごはんを作ったらお盆に乗せ、藍子の部屋の前に置く。まるで、引きこもり。

藍子は冴えない毎日である。人の中にいながら、人と暮らしてない感じなのだ。

秀明は遠くでそれを眺めながら、ああオレのせいなのかなあという顔をしてる。

秀明が藍子の告白を断ったのには理由があった。彼は、幼い頃、近所のおねえさんに性的いたずらをされていた。それがトラウマになっており、高校生になった今も、女性とつき合うのが怖いのだ。藍子のことは、かわいくて明るくて素敵だなと感じてる。でも……怖いのだ。

環は、放課中に秀明の席へ行き、怒鳴った。

「豆沢くん！ 藍子の青春を返してあげて！ あんたがふったせいで、藍子、あんな可哀想な体質になっちゃったのよ！」

秀明は泣きそうである。確かに何とかしてやりたいけど、女子怖い……。

秀明は、幼い頃、おねえさんにちんこをいじられてた恐怖を思い出して、泣きそうだった。

環は何とかして、秀明と藍子をくっちなきやいけないと感じていた。でないと、藍子はずっとあんなままだと。

しかし、秀明はどう考えても、女性恐怖症に陥ってる。

環は悩みに悩んだ。眼鏡をくいと上げる。

「もうこれしかない……」

環は、秀明がトイレに行ってる隙に彼がいつも持参してる水筒の中に強壮剤を入れた。これを飲むと、ちんこがギンギンになる。

そして、秀明がそれをがぶ飲みしたのを確認するとおもむろに、話があるのと言い、便所に連れて行き……。

名づけて、「一度やっちゃえば、女なんか怖くねえ」作戦である。

便所の中で環は処女を、秀明は童貞をそれぞれ失った。

「豆沢くん。もうわかったでしょう。女なんか全然怖くないのよ。早く藍子のところに行っただけで」

「た、環さん！」

「な、何よ！」

「僕とつきあってください！」

「ええええええ」

その頃、藍子は保健室のベッドの上で寂しく、弁当を食べていた。

「あーあ。冴えないな。まるで、病人だよ」

秀明くんと一緒に食べたいなとため息をつく可哀想な藍子。

しかし、藍子にも得することは少しあった。

藍子が歩いてる時、酔っぱらい運転のトラックが藍子に向かって突進したのだ。周りの通行人は悲鳴を上げたが、藍子には結界がある。

トラックを弾き飛ばし、藍子は無傷だったのである。トラックはガードレールに突っ込み、むちゃくちゃ。だけど、藍子は無傷。

「うふふふ。こいつはいいや……ってよくない！」

秀明は悩んだ。確かに一瞬環を好きになってしまったが、よく考えたら、女性恐怖が治ったんだから、藍子とつき合ってもいいじゃないか。

秀明は決意した。オレも男だ。うじうじしてちゃいけない。オレが藍子ちゃんの体質を治す。これはオレの新たな一歩でもある！

秀明は、勇んで藍子の元へ向かった。

藍子がタバコ屋の前あたりを歩いてる。

藍子が秀明に気づいた。

でも、どうしたらいいかわからない。秀明が自分の半径3メートルに近づいたら、弾き飛ばしてしまうのだ。

「藍子ちゃん」

秀明が大声で叫ぶ。

「なあにー」

藍子が大声で返す。

「オレ、藍子ちゃんのことが好きだ。つきあおう」

「え」

藍子は瞳がうるうるしてしまう。秀明がにこつと笑う。

「秀明くん……」

何と不思議なことだ。安心したのか、藍子の結界が……野良犬が寄ってきて、藍子の足に抱きつき、腰をマッハで振っている。秀明の愛のパワーで、ついに藍子の結界が解かれたのだ！

「秀明くん！」

「藍子ちゃん！」

藍子が両手を広げる。秀明が走る。

そして、抱き合う。

その瞬間、酔っぱらい運転の自動車が二人に向かって突進する。

それを偶然見かけた環が悲鳴を上げる。「いやあああああああ」

ガッデム！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9148s/>

テリプリ(ぶっ壊しバージョン)

2011年5月2日00時26分発行